

胡堂賞

これから変わる自分

日詰小学校 6年 吉田 蒼空

私は小さいころから人見知りで、周りの環境が変わると、すぐには打ち解けられない性格だ。そんな私は、初めて会った人でもしっかりと話せるような人になりたいと考える。そのために、日頃から席替えをチャンスと考えて、授業準備の五分の時に話しかけるようにしている。

私は、「空と大地に出会う夏」という本を母にすすめられて読んだ。この本の主人公は、私と同じ小学六年生の理一郎という男の子で、言葉できちんと説明できないことや無駄がきらいな性格だ。

私が一番心に残っているのは、理一郎の考え方の変化だ。物語の始めは楽しくなさそうにピアノを弾いていた理一郎が、最後には楽しそうにピアノを弾いていた。その変化は、性格が真逆の海空良と大智と出会い、様々な経験を通して理一郎の考え方が変化したからだと考える。初めは何事にも合理的で、言葉で何でも表そうとしていた理一郎が、物語の最後に「とくべつな夏だったよ」とあいまいな言葉でつぶやいたところが感動した。自分とは違う考え方をする友達がいることで、こんなに人は変わるんだなと思った。

私は、友達との関わりの中で自分が変わったと思う経験がある。それは、タグラグビーの試合を仲間と見ていた時だ。自分では惜しいとは思っていなかった他の人のプレイを友達は、「ここをこうすればいいのに」と詳しく分析して考えていた。それを聞いて、そこまで深く考えていることに驚き、自分の考えが広がったような気がした。自分に新しい刺激を与えてくれる仲間がいてよかったなと考える。

また私は、理一郎の無駄がきらいという考え方とは反対で、無駄が大切だと考える。それは、手間を省くとすぐ物事が終わってしまい、思い出に残らず、もったいないと思うからだ。小学校最後の学習発表会では、各シーンに分かれて自分達の力で一から台本を作り上げるという活動をした。今までは渡された台本を覚えることしかしておらず、初めての台本作りに苦労した。それでも自分がやらなければならないと思い、友達と一緒に考えながら必死

に作った。最後に一通り通せた時、自分達の力でできたことが嬉しかった。台本作りという一見遠回りに見えるものでも、一つの同じ目標に向かって協力する力が付いたと考える。無駄だと思ふことは、実は無駄ではなくて、どこかに役立つということを改めて学んだ。

私はこの本から、友達と関わっていく中で自分の考え方が変わっていくことの大切さを学んだ。また、何かに挑戦する時、初めから無駄だと考えず、いつか自分のためになると思って挑戦したい。自分の考えをもちながら、友達の良いところを取り入れて、自分をよりよくしていきたいと考える。

図書名 空と大地に出会う夏
著者名 作：濱野京子

絵：しづこ

審査員講評

胡堂賞感想文について

主人公の人物像を深くとらえ、主人公の気持ちの変化を自分の体験と重ね合わせてまとめている素晴らしい作品です。また、主人公への共感だけでなく相違点にも目を向け、読書することによって自分の体験を捉え直していく姿勢は、より豊かな生き方につながっていくと思います。

教育長賞

現実世界の壁があるからこそ

日詰小学校 6年 森田 結太

「夢をかなえる」ことは誰にとっても憧れだけど、それを実現させるのは大変だ。秘訣なんてこれっぽっちも無くて、自分から行動しなければ変わらない。

水野敬也の「夢をかなえるゾウ」は、現実を変えたいサラリーマンと、ゾウの神様の話だ。

作中の自分は、「今日からは一カ月に五冊は本を読もう」と決意して本を買ったが、数ページ読んだだけで止めてしまった。そんな自分にハッとした。僕も続けたいと決意したが、途中でやめてしまったことが多々ある。「人の意志は脆く、少しの欲で折れてしまう。何かを変えたいときには具体的な行動をとらないと変わらない。」と筆者は伝えている。私は、これに共感した。意志を変えることは、頭の中で動いていることであり、現実世界では何もしていない。すなわち現実世界にとっては、何も変わっていないことになる。筆者はこうも言っている。「意識を変えることは言い方を変えると『逃げ』になる。」確かに、「これから変わる」と勢いづいているときは、つらい時を乗りこえた姿を想像していて、つらい作業のことは、あまり考えていない。また、その作業を行うのは今ではなく、未来の自分だ。こう考えると、意志を変えることは、未来の自分に重荷を背負わせているだけだということに気が付いた。

作中、著者はこう書いている。

「今まで無理やったら、これからも無理や。変えるならそれは、『今』や。『今』何か一歩踏み出さんと。自分それ、やらんまま死んでくで。」僕は、著者がこの言葉を通して、何をするにしても遅くないことを伝えようとしていると思う。みんな後悔なんてしたくない。しかし現実には、財力、年齢、世間体、将来の不安、様々な原因が不安となって「夢」をかなえられないでいる。自分の才能を生かせないまま、やりたいことができないまま後悔を抱えたままに人生を終えていく。そんな人がたくさんいる。夢をかなえるために必要なことは、案外簡単に始められるものだ。昔からやりたいと思っていた

もの、やっていてワクワクするもの、自分がやりたいこと等がぴったりはまる仕事はたくさんある。僕は、モノ作りが好きで、それを生かせる仕事に就きたいと思っていたが、六年生になって現実が見えてくるにつれ、あきらめかけていた。しかし、パリオリピックを四十一歳で五連覇した人などの、何があっても突き進む人を見て、どんなことが足かせになっても、夢をかなえられない理由には決してならないことに改めて、気づかされた。

今回、本を読んで、将来の夢は叶えるのが難しいものではなく、壁があっても、チャレンジするのが大切だと思い直した。どんな困難があっても、夢に向かって一歩一歩進みたいと思う。後悔のない人生を目指して。

図書名 夢をかなえるゾウ
著者名 水野 敬也

優秀賞

「福島ゲンゴロウ物語」を読んで

西の杜小学校 5年 佐々木 悠翔

ぼくは、昆虫のゲンゴロウが苦手です。苦手な理由は、黒光りしていて、形が気持ち悪いからです。また、ゲンゴロウは池の中で、魚やカエルの死がい食べているそうです。そういうところも、ゲンゴロウは気持ち悪い虫だと思ふ理由です。

ぼくがこの本を読もうと思ったきっかけは夏休みに家族で福島県に旅行に行き、自然が豊かで、食べ物おいしい福島県が大好きになったからです。「福島ゲンゴロウ物語」という本のタイトルを見て、読むことを決めました。本を読んで、ゲンゴロウが、絶滅危惧種に指定されていて、生息数がとても少なくなっているということを知り、おどろきました。ぼくも、自然が豊かな紫波町で暮らしていてすぐ近くに田んぼがありますが、これまでにゲンゴロウをこの目で見たことはありませんでした。本には、ゲンゴロウは、水がきれいな田んぼに生息していて、ゲンゴロウが生息しているところは環境が良い場所といえることが書いていました。また、ゲンゴロウは、死んだ魚などを食べて、水をきれいに保つお掃除屋さんの役目を持っていることもわかりました。ゲンゴロウに悪いイメージを持っていましたが、ぼくは、ゲンゴロウを見直しました。ゲンゴロウは、昔は田んぼにたくさん生息していて、めずらしい昆虫ではなかったそうです。しかし、田んぼで農薬を使ったり水路をコンクリートに変えたりしたことで、ゲンゴロウの生息場所がどんどん減っていき、とうとう絶滅危惧種になってしまったそうです。

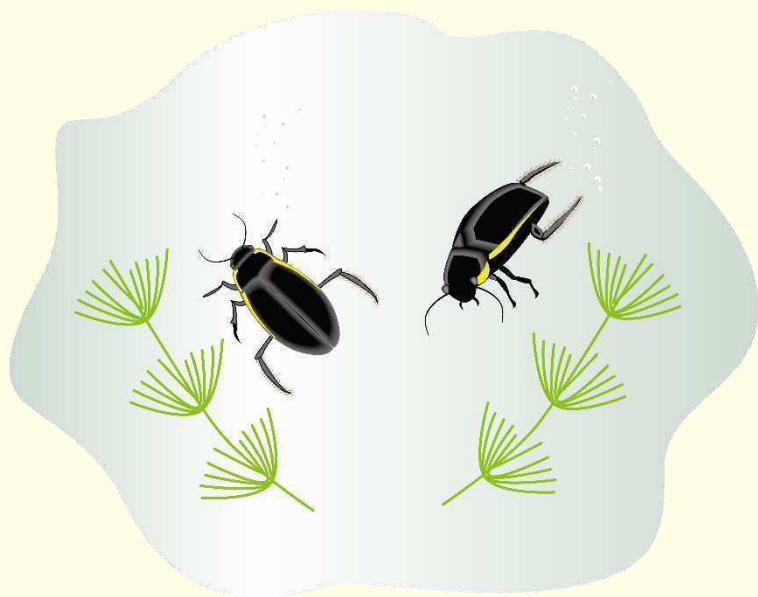
このゲンゴロウを研究しているのが、福島県の農業試験場で研究者として働いている三田村さんです。三田村さんは、ゲンゴロウの研究を通じて、福島県の原因事故からの風評被害を減らせないかと考えています。

ぼくは、原因事故の風評被害とゲンゴロウにどういう関係があるのかと思いました。原因事故の影響で、東日本大震災直後は、福島県の農作物を買うのをためらう人が多かったそうです。それを何とかして解消しようと、三田村さんは、ゲンゴロウが元気でいられる田んぼには、たくさん生き物がいて、虫が住める良い環境でできたお米は安心だということを証明したいと考

えているのです。

ぼくも福島県に旅行に行き、たくさんのおいしいものを食べました。しかし、今も福島県産だからという理由で、福島の農作物を食べないという人がいるそうです。そのことを知り、ぼくは悲しい気持ちになりました。本を読んだことで、福島県の農作物は、検査を受けて、安全であるということもわかりました。ぼくは、一人一人が風評被害に流されず、正しい知識を持つことが大切だと思いました。そして、みんなも福島の農作物を食べ、そのおいしさを知ってほしいと心から思いました。

図書名 福島ゲンゴロウ物語
著者名 谷本 雄治



優秀賞

最高のビリが教えてくれたこと

赤石小学校 6年 中里 琉莉

もしも、クラスに一人でも大縄跳びが苦手で跳べない人がいたら、みなさんはどんな気持ちになるだろう。

私だったら、一緒に、そして精一杯、練習を重ねたい。なぜなら、私自身大縄跳びが苦手で、苦勞した経験があるからだ。私の学校では、毎年長縄大会が行われている。三年生で転校してきた私は、初めなかなか跳ぶことができなかった。しかし、友達が縄への入り方や跳ぶ位置を優しく教えてくれた。そのおかげで私は跳べるようになり、みんなと楽しく長縄大会に参加することができた。だからこそ、もしクラスに跳べない人がいたら、私は全力で支えてあげたいと思う。

この本は、運動会の学年種目の一つである「大縄とび」を『最高のビリ』でしめくくる物語だ。もちろん、運動会当日までさまざまなことが起こった。このクラスには、縄に入るのが怖くて跳べない矢部ちゃんがいる。仲間外れにしたいという思いと、勝ちたいという思い、そして、やりたいという矢部ちゃんの思いが帰りの会で繰り広げられたとても長い話し合いの中に詰まっている。嬉しさや悲しさなどさまざまな感情が、この話し合いから読み取ることができた。矢部ちゃんは、あまり表情を変えない穏やかな性格だ。たくさんの意見を聞き、クラスの気持ちが一つになり、「みんなで跳んで、みんなで楽しくやればいい。」という結論に至った。矢部ちゃんと一緒に大縄跳びをすることが決まった。

私は、この話し合いのきっかけを作った金沢亜希子がすごいと思った。もしも、私が亜希子の立場だったら、亜希子のように本当の気持ちを伝えることができないと思う。自分の気持ちを伝えられる亜希子は本当にすごいなと感じた。

運動会当日、晴れ間が広がり、運動会日和であった。どの競技も全員で取り組み、競技優勝を勝ち取った。なにより競技の一つの大縄跳びが心に残った。予想通りの最下位だったけれど、クラスのみんなにとっては最高のビリだった。矢部ちゃんはクラスメイトの村松が抱えて一緒に跳んだ。そのおかげ

げで、六分間跳び続けることができた。大縄跳びが苦手だったけれど、七十一回みんなと一緒に跳んだ。自分の力だけで、八回も跳ぶことができ、先生もクラスメイトもとても驚いた。矢部ちゃんと優しいクラスみんながいたからこそ、最高のビリになったのだと思う。

私にもたくさんのクラスメイトがいる。一人一人性格も違うし、得意や不得意も違う。だからこそ、相手の気持ちをしっかりと考えたりすることが大切であるなど改めて思った。これから、相手のことを考えたり思いやりったりして生活していきたいと思う。また、このクラスのように誰にでも優しく、平等に接することができる人になりたい。

図書名
著者名
みんなで跳んだ
滝田 よしひろ

入 選

自分の力で未来を創る

西の杜小学校 6年 藤原 蓮都

ぼくは、歴史が好きです。それは、ぼくの知らない時代の出来事を知ることが出来るからです。そして、知れば知るほど、そこに人の意思や考え、葛藤、苦しみや怒りなど様々な感情が交錯していて、いろいろな人物の人生から多くのことを学べるからです。

ぼくは、「日本の未来を変えた男 洪沢栄一伝」という本を読みました。母に勧められたのと、新一万円札になる人とはどんな人なのだろうと興味をもったからです。

洪沢栄一は、農家に生まれ、幼いころから家業である藍玉の製造・販売・養蚕を手伝い商売の才能がある子どもでした。しかし、生活をしていくうちに幕府中心の政治に疑問をもつようになります。栄一は、一橋家に仕える武士となり、のちに十五代将軍・徳川慶喜のもと、幕臣になりました。ですがそれは、栄一が本当にやりたかったこととは違うことに気づきます。そんな中、フランスのパリ万国博覧会に行かないかと提案され、日本にすることが苦しかった栄一は、フランスに行くことを決意します。栄一は、フランスでさまざまな文化を学び、それを日本にも生かそうと考えました。日本にもどった栄一は、多くの会社や銀行を設立し、鉄道や建築会社、ガスや電気などのインフラ事業、養育院や病院などにも関わり、関東大震災の復興にも力を尽くしたそうです。洪沢栄一は、日本の発展を常に考え、自分ができることを一つ一つ実践していった人であることが分かりました。

ぼくが一番心に残ったのは、栄一が外国の文化を日本に取り入れようと決める、行動に移したことです。なぜなら、外国の文化を安易に「すごい」と思っただけで終わるのではなく、日本全体をより良くしようと、それを日本に取り入れ、行動したからです。約五百の会社に関わった栄一ですが、栄一の考えや外国文化を日本に取り入れようとしたのを周りの人が受け入れていて、それだけ栄一は多くの人から信頼されていたのだと感心しました。

もし、ぼくが栄一と同じ立場だったら、まず農民なら農業以外のことには

関わらなかったかもしれないし、仮に関わったとしても、栄一のように「日本を変えよう」と思ってもすぐに行動するのは難しいと思います。いつかそんな行動力のある人間になりたいとも思いました。

そして、最も心に響いたのは「商人にも道徳が必要である。」という言葉です。自分さえよければいいとか、ズルをしても勝てばいいなどというような考えがはびこっているのは、経済は発展しない。みんなで幸せになるのが重要だと考えていたのです。栄一は、自分の意見をしっかりともっていて、周りの人の利益と幸せを考えていた人なのだと思います。

ぼくは、この本に出合い、「渋沢栄一」という一人の人間の生き方からたくさんのことを学びました。そして自分自身も行動する勇気を持ち、周りの人を幸せにできる人間をめざして、生きていきたいと思っています。

図書名 渋沢栄一伝 日本の未来を変えた男
著者名 小前 亮

入 選

考え方や見方を変えて

日詰小学校 5年 小原 栞奈

「おねえちゃんって、もうたいへん！」この題名を見たのがきっかけで、私はこの本に出会いました。なぜなら、きっと共感できると思ったからです。

この本は、一年生のココ、そして3さいのナツちゃんの日常がえがかれた作品です。ナツちゃんとココって、きっと仲がいいのかな、ワクワクして読んでみると、私のこととにたようなお話があり、気付くともう読み終わってしまいました。私は、お姉ちゃんのココと共感できた所があります。それは、妹のナツちゃんが、ずっとくつついてきて、保育園にいるはずなのに、小学生の学童クラブに来てしまったという場面です。私が幼稚園の年中のとき、私の妹は年少で、お昼ねする時間に、妹がさびしくなったから、妹のクラスに私が行った日もありました。お昼ごはんの時間に妹のクラスに行った日もありました。それも、一日だけでは終わりません。「私は友達といっしょにすごしたいのに」そう思いました。きっとココも同じ気持ちだったと思います。もう一つ共感できる場面があります。それは、親などいろんな人が妹にだけ優しいということです。もちろん、私にも優しくしてくれるときだってあるけれど、あつとう的に妹の方が優しくしてあげる回数が多いです。ケンをすればいつも私のせい、物の取り合いをすれば「ゆずってあげて」といつも私だけがまん、「妹ばかり…」でも、こんなことを思う自分もダメかと思い、落ちこみました。けれども「私は悪くない」そう思った時、私のお姉ちゃんが思いうかびました。「お姉ちゃん…あつ」私はここで気付きました。私は、三人姉妹の真ん中です。私にもお姉ちゃんがいます。「お姉ちゃんも同じだったのかもしれない」ココとナツちゃん、お姉ちゃんと私、「もしかして、私とお姉ちゃんがケンカをすると、いつもお姉ちゃんのせいになっていたかもしれない、物の取り合いをすると、いつもがまんしていたかもしれない」と思いました。今は、お姉ちゃんはなんでもゆずってくれます。おかしを選ぶとき、「これいいよ」とゆずってくれたり、自分の食べるものからちよつとくれたり、そんなお姉ちゃんは、まるでココのようでした。

物の取り合いをすると、お母さんやお父さんに「ゆずってあげて」と言われるのは、私が優しいお姉ちゃんだと思ってくれていたからじゃないのかな？そして、私ばかりがまんしてきたわけじゃないのかもしれない。私のお姉ちゃんも同じ経験をしてきたからあんなに優しいのかな。そう思うと、心があったまりました。

もし、ココに会えたら、「みんな、おもしろいやりをもって生活しているんだよ。」と伝えてあげたいです。

見方や考え方を変わると、前向きになれる。そうして笑顔あふれる毎日ですごくしたいです。

図書名
著者名

おねえちゃんって、もうたいへん！
作…いとう みく
絵…つじむらあゆこ